

原爆文学研究会報

第二〇号

原爆文学研究会 二〇〇七年六月

銃声と「平和」 二代続いて市長が銃撃されたという事態をどのように受け止めれば良いのだろうか。二〇〇七年四月一七日、伊藤一長長崎市長（当時）が凶弾に倒れた。この報に触れた多くの人が、一九九〇年一月一八日に起こった先代の本島等長崎市長（当時）銃撃事件を思い出したと思う。そして、日頃から「平和都市」の長として平和行政に取り組み、原爆忌には平和宣言を発信していた二人が銃撃されたことに、複雑な思いを抱いたことだろう。

私は「平和都市」なのに、と当初は逆接でこの事態をとらえていた。しかし、今は「平和都市」だから、と順接でこの事態をとらえて直している。本島元市長が天皇の戦争責任発言によって銃撃されたときは、彼に寄せられた手紙（詳細は『増補版 長崎市長への七三〇〇通の手紙』一九八九年九月、径書房）によって、潜在していた「国民」の多様な声が露わになった。この発言がナガサキの長によって市議会でなされたものであったがゆえに反響も大きくなったのは確かである。「平和都市」だから、一つ目の銃撃は起きたのだと言える。

二つ目の銃撃事件は、戦争責任に関係するような思想的要因によるものではないらしい。しかし、ほかならぬ「平和都市」において市長が再び銃撃されたということによって、「平和」とはほど遠い現実が露わになったのは確かである。「平和都市」だから、と立ち止ま

ってこの事態に向かい合う必要があるのだと私は考える。（中野 和典）

第二〇回 原爆文学研究会報告

二〇〇七年一月一六日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した「第二〇回原爆文学研究会」には約二〇名が参加。

高野氏の発表については「トラウマという概念の「積極性」を強調することは、苦痛をとまなう位置に被爆者を押し込むことになつてしまうのではないか」「冒頭部において「イロシマ」と発音されていたのが結末では「ヒロシマ」に変わっているのはなぜか」「欧米を男性に、日本を女性に表象する物語は多くあるが、「二十四時間の…」においてそれが反転しているのはなぜか」等の質疑がありました。



ウルシユラ氏の発表については「ポーランドにおいてヒロシマはどのようなイメージを持たれているのか」「原爆を題材とした日本の文学をポーランド語に翻訳することに、どのような意義を感じているのか」等の質疑がありました。

◇ 研究発表1

映画から学ぶ「ヒロシマ」の語り方

『二十四時間の情事』のテキスト分析

高野 吾朗

原爆の記憶のされ方（あるいは、被爆体験なき人間による原爆の語り方）に関する従来の議論に対して、重要な補助線の役割を果たしてくれそうな映画テキストの一つに、『二十四時間の情事』（原題 Hiroshima Mon Amour/アラン・レネ監督作品一九五九年）がある。徐々に復興が進む戦後すぐの広島街に、一人のフランス人女優（実名は不明）がやってくるところから、この映画は始まる。母国に夫も子供もある彼女は、この広島で、一人の妻子ある日本人（被爆していない実名不明の男性）と出会い、不倫関係に陥る。彼女が離日する予定日の一日前から、離日当日までのおよそ二十四時間を、二人がどのように過ごしたか——それがこの物語の大枠である。

この映画はこれまで、フランス人女性のキャラクター分析を中心に据えながら論じられることが多かった。なかでもとりわけ注目されてきたのは、大戦中に彼女が負ったとされる、精神的トラウマの描かれ方である。彼女は戦時中、故郷の街ヌヴェールにおいて、「フランス人の敵」であるドイツ兵を愛してしまう。二人は結婚を夢見たが、フランス解放の当日、その兵士はフランス人らに虐殺され、虐殺を目撃してしまった彼女は、そこから狂気の道へと入り込む。それから数年を経た戦後の広島で、不倫相手の日本人男性とカフェで見つめあううちに、彼女はあの時の狂気へと瞬時に立ち戻り、目の前の日本人男性と昔のドイツ人の恋人とを次第に区別できなくなっ

ていく。この点に着目する従来の読解例としては、「大戦以来の彼女のトラウマが日本人男性のおかげで次第に癒されていく過程、それこそがこのストーリーの根幹だ」「彼女の心の中における、リアリズム的な物語記憶とモダニズム的なトラウマ記憶の絶え間なき相克こそが、この映画の主題であろう」等が挙げられる。どちらも、それなりに重要な意義を持つテキスト分析だと思われる。

しかしその一方で、日本人男性のありように関しては、フランス人女性の「引き立て役」に過ぎないかのような論じられ方が多勢を占めてきたように思えてならない。彼を主人公ととらえなおして視聴した場合、いかなる鑑賞法が可能か——私の今回のテキスト分析の焦点はそこにあった。そして、この視点の転換を通じて見えてきたのは、被爆体験を全く持たない一人の日本人が、異なる戦時トラウマ体験を持つ一人の外国人（の視点）と接触することにより、次第に「ヒロシマ」世界平和の理想的象徴」という「一枚岩」的なイデオロギーへと縛られていく、というプロセスであった。映画冒頭でフランス人女性に対し、「きみはヒロシマを見ていない」と強く言い切ったこの彼でさえ、「あなたの名はヒロシマ」とまで彼女に言わせたこの彼でさえ、実は彼女同様、多角的にヒロシマを見ることのできない存在（すなわち、ヒロシマを「世界で最も痛ましい犠牲者」としてのみ見なしてしまう存在）ではない——日本人男性の描写を通じて暗示される（被爆体験なき）日本人にとってのヒロシマ」の物語こそ、この映画のもう一つの重要要素なのではあるまいか。その意味でこの映画は、「ヒロシマについて」の物語というよりは、むしろ「真のヒロシマを理解することの（不）可能性について」の物語なのである。

◇ 研究発表2

人間存在の不安

——「収容所文学」と「原爆文学」

ウルシユラ ステイチエツク

発表者が広島大学に提出した博士論文の正式なタイトルは、『人間存在の不安——「収容所文学」と「原爆文学」』である。本論では、ヨーロッパの「アウシュヴィッツ収容所」と、アジアの「ヒロシマ」で起こった二つの悲劇を描いた文学作品をとりあげた。そこにおいて、この二つの悲劇が作者によってどのように語られているのかということ、こうした極限状態に置かれた人間が、他の人間に対してまた神に対して、どのようにふるまうのかという視点から作品を分析した。その上で、アウシュヴィッツとヒロシマの悲劇を描いたこれらの作品が、共通の要素を内在しており、事実に基づいて書かれた作品という共通点、つまり「事実文学」という同じカテゴリーに分類できることを論じた。また、人間がこのような極限状況で生き残るために何が必要であるのかを明らかにした。

さらに方法としては、論文では、アウシュヴィッツとヒロシマの悲劇を描いた文学作品を、以下の視点から考察した。

ポーランドにおける「アウシュヴィッツ収容所の虐殺」と日本における「ヒロシマの原爆投下」とは、前例のない、人類に対して犯された極悪非道な行為である。この二つの残虐行為は、そこに至る政治的・社会的・文化的な背景や状況など、あるいは犠牲者の数と、その心身の苦悩など相違点も多く、単純に比較することはできない。しかし、両者とも人間が他の人間に対して行った最も恐ろしい行為

であり、また、苦しんだ側の人間に焦点を合わせて言うならば、極端な状況におかれた人間の態度と行動という点では共通している。従って、この二点からは両者を比較することが可能であろう。発表者はこれらを「人間存在の不安」と名付け、この視点に基づいて論を進めた。

既に述べた内容的な側面だけではなく、「収容所文学」と「原爆文学」の形式面にも言及した。この両者は、歴史的な現実に基づいて書かれた作品であるという共通点がある。したがって、ヨーロッパ文学研究の「事実文学」という、同じカテゴリーに属すると言える。この「事実文学」というカテゴリーは、日本文学研究者の間で用いられる「記録文学」という用語に近い。

また別の角度からもう一点、「収容所文学」と「原爆文学」の作品を書いた作家たちを二つのグループに分けて論じた。すなわち、「収容所の被害者」（男性作家であるポロフスキと三人の女性作家であるポスミイシ、シユマグレフスカとコツサク）と「収容所の非被害者」（アンジェイエフスキとナウコフスカ）、また「被爆作家」（原民喜）と「非被爆作家」（井伏鱒二）である。アウシュヴィッツあるいはヒロシマの悲劇を実際に経験した作家たちの悲劇の語り方と、悲劇を経験していない作家たちの語り方を比較して、これらの相違を明らかにした。アウシュヴィッツに収容されていた作家、あるいは被爆した作家たちは、自分自身の体験や感情を非常に細かく描写している。しかもそれは、人間の弱点を暴露した非常に現実的な描き方である。というのは、その現実や絶望は彼ら自身が経験したことであり、絶対に空想ではありえないからである。逆に、収容所経験のない作家あるいは非被爆作家は、登場人物の悲劇を作家の想像に基づ

いて描いているので、作中人物の行動について非常に理想的な考えを導入している部分が見られる。さらに、場面や出来事の描写は詳細だが、実在の状況のように真に迫って描かれていない。それはおそらく作家自身が体験していないからである。人間の善さに対する信頼は理想的ともいえ、かなり樂觀主義的である。しかし、このような相違があるにもかかわらず、また残酷な主題に触れるにもかかわらず、どちらの作家グループも、多くの場合、終末部は肯定的な態度で作品を締めくくっている。

彙報

第一九回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇六年二月一六日(土) 一四時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号室
- 内容 研究発表

映画から学ぶ「ヒロシマ」の語り方

↳『二十四時間の情事』のテキスト分析

高野 吾朗

人間存在の不安

——「収容所文学」と「原爆文学」

ウルシユラ ステイチエツク

機関誌「原爆文学研究」第六号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」第六号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書式 縦書き、三〇字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇七年八月月中旬、データファイル(Wordか一太郎)を添付しての投稿の場合は八月末日(プリントアウト原稿を添えて郵送して下さい)。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一、〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八五七一―一九三 佐世保市沖新町一―一 佐世保工業高等専門学校 中野和典研究室

編集後記

「原爆文学研究」第六号の投稿締め切りは、例年より二ヶ月遅い設定になっています。例年六月末の締め切りには原稿がそろわない状況を鑑みての変更です。一方で、研究会の日程を延期することも続き、事務局としては皆様に申し訳ない限りです。次回の研究会は別紙の通り七月二十八日(土)に開催することになりました。私は毎回、やり直すつもりで研究会に臨んでおります。研究会へのご参加並びに機関誌への投稿をよろしく願います。(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一―六五二〇 福岡市中央区六本松四―二―一

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀲剛研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>